

本学幼児教育科の教育課程に対する学生の意識調査(Ⅲ)
— 第3次追跡調査 —

森本 恵美子*¹ 浅野 俊道*²

**A Students' Opinion Survey of the Curriculum of the
Department of Early Childhood Education of
Osaka International College (Ⅲ)
- The third Follow-up Survey in 26th Year -**

Emiko Morimoto* Shundo Asano*

Abstract

The follow-up survey was conducted to find out how students evaluated our curriculum, how the evaluation for our curriculum had been changed since the opening year of the department and what in the curriculum should be revised. The first survey was carried out in 1977 by Yasuichi Suzuki who was the then director of academic affairs. The article reporting the results of the survey pointed out that the students were not satisfied with our curriculum and our system to help them find a job and that these should be made better. The second survey was made in 1985 by Shundo Asano with the same questionnaire made by Suzuki. The second article based on it showed that our curriculum and our system to help them find a job were improved and made satisfactory for them. This article, which is the third of the series, indicated that the good curriculum and the good system to help students to find a job are taken for granted now and not major issues any longer. It also revealed that it is in their interest to make many friends during their academic life.

キーワード

教育課程、幼児教育、満足感、適合感、学生類型

*1 もりもと えみこ：大阪国際大学短期大学部助教授

*2 あさの しゅんどう：大阪国際大学短期大学部教授〈2002.11.18受理〉

1. 調査目的

本調査は、本学幼児教育科の教育課程に対する学生の意識に関する追跡調査である。幼児教育科は1976年に開設され、本年（2002年）で27年目を迎えている。

第1回目の調査は、幼児教育科の第1期生に対して幼児教育科の教授であった鈴木康一（当時教学部長）が1977年12月に実施し、帝国学園紀要1978年4号に「本学幼児教育科の教育課程に対する学生の意識調査」として報告した（以下、第1次調査という）。

第2回目の調査は、幼児教育科の第9期生に対し鈴木の後を受けて浅野俊道が1985年12月に実施し、帝国学園紀要1986年12号に「本学幼児教育科の教育課程に対する学生の意識調査（Ⅱ）—10年間の比較—」として報告した（以下、第2次調査という）。

今回の第3次追跡調査は、幼児教育科の第25期生に対し2002年3月に実施したものである（以下、今回調査という）。

調査は、追跡調査としての意味を持たせるために鈴木が第1次調査のために作成した調査用紙を用いることを原則にした。第2次調査と今回調査に使用された調査用紙は、それぞれ前の回で使用された調査用紙に教育課程の改正に伴う必要最低限の変更を加えたものである。

幼児教育科を取り巻く環境条件は、この4半世紀の日本社会の変化と相まって激変した。第1次調査と第2次調査の8年間に見られた変化は概ね以下の通りである。

- (1) 10年間の保育者養成教育の経験を蓄積し、開設当初に見られた不手際は解消された。
- (2) 個々の授業内容に実践的知見が加わり、充実が図られた。教育課程の改正が図られ、実践的な諸教科目が新たに開設された。
- (3) 新入生歓迎会・ゼミ活動・夏期研修会などの行事が、幼児教育の一環として位置づけられて実施されるようになった。
- (4) 学外実習実施指導体制（事前指導のための見学の実施・実習受け入れ先との連絡調整・学生指導など）が整備された。
- (5) 1983年に定員増がなされた。（100→150）
- (6) 本学の施設・設備が相対的にはあるが、学生生活を過ごす上で飛躍的に改善された。
- (7) 学生の学外実習・就職、教職員の研究・出版・講演・講習・非常勤などの活動を通して幼児教育の関係諸機関からその存在を認識され、一定の評価を受けるようになった。
- (8) 出生率の減少に伴い、保育者への就職状況が年々悪化してきた。

第2次調査と今回調査の17年間に見られた変化は概ね以下の通りである。

- (1) 1983年度の定員増に伴い、1985年度から保育士資格の取れない音楽コース・体育コースが開設された。両コースの定員は、増加分の50名があてられた。
- (2) 教育職員免許法が1990年・2000年の2度にわたり改正された。保育士資格に関しても1992年・2002年の2度にわたり改正された。教育課程はこれらの改正により一変した。
- (3) 学外実習が一層重視されるようになった。教育実習の単位は1990年には4単位から5単位に増加され、事前・事後指導の1単位分が加わった。1992年に保育実習に関しても同じように4単位から5単位に増加され、事前・事後指導が1単位加わった。

本学幼児教育科の教育課程に対する学生の意識調査(Ⅲ)

2002年から保育実習はさらに5単位から7単位に増加された。

- (4) 保健・栄養に関する教科目は、現場における看護・医療・給食などに関わる専門職による支援体制の整備充実に伴い整理・統合され軽減化された。
- (5) 幼児教育の現場への情報機器の普及に伴い、「教育機器演習」「パソコン演習」などの情報機器関係科目が開設された。
- (6) 従来、保育者養成教育課程の中に開設されていた小学校の教科目が幼児教育科目に置き換えられた。
- (7) 都市化の一層の進展に伴う核家族化による家庭における育児力の低下に対処するために保育相談の教科目が新設された。
- (8) 児童文化演習やレクリエーションなどの実技に関する教科目が新規に開設された。
- (9) 人権教育・障害児教育に関する教科目が新たに開設された。
- (10) 学生の実践能力を向上させるために本学が独自に必修科目として開設していた幼児教育演習Ⅰ・Ⅱが、教職科目として教育職員免許法の中に位置づけられた。この教科目の一環として実施されているレクリエーション実技研修・実技発表会は、学外実習と並んで教育課程の中核的意義を持つようになってきている。
- (11) 学外実習実施指導体制（事前指導のための見学の実施・実習受け入れ先との連絡調整・学生指導など）の一層の整備充実がなされた。
- (12) 1999年、保母の名称が保育士に変更された。
- (13) 社会進出する女性の増加に対処するために保育所の増設政策が実施され、一般社会での就職難にもかかわらず就職はおおむね順調に推移している。
- (14) 18歳人口の減少に伴い幼児教育科への入学が容易になり学生の学力の格差が拡大し、生活経験の不足が目立つようになり、目的意識の希薄な学生が散見されるようになってきた。これに伴い第2次調査以前には特別な理由以外には無かった退学者が、幼児教育科においても他学科同様に見られるようになった。

調査の目的は、第1に幼児教育科の学生が本学の教育課程をどのように評価したかを明らかにすること、第2に教育課程に対する学生の評価がどのように変化してきたかを明らかにすることである。以上のことをふまえ現行の教育課程にどのような課題があるかを明らかにすることが第3の目的となる。

第1次調査では開設当初ということもあり第1の目的が主な関心事であった。開設当初は何をどのようにすべきか暗中模索であり、多くのことが後手に回った。学生の教育課程に対する評価は惨憺たるものであった。第2次調査では教育課程に対する学生の評価が変化し好転したことに関心が移り、第2の目的が主な関心事になっていた。開設から4半世紀を経た今回調査では今後の課題を明らかにするという第3の目的が主要なものになる。

2. 調査方法

(1) 今回の調査方法

- (a) 実施方法：幼児教育科に在籍し卒業が確定した2回生全員を調査対象とする悉皆調査

を実施した。調査対象学生数は206名、回答者数は193名、回収率は94%である。

なお、第1次調査、第2次調査ともにそれぞれ鈴木・浅野が自分の選択科目の受講生を対象にした便宜抽出法による標本調査である。第1次調査では在籍者数121名、抽出者数80名であり、抽出率は66%、回収率は100%である。第2次調査は在籍者数155名、抽出者数93名であり、抽出率は60%、回収率は100%である。調査方法の違いはあるが、全学生に対する回答者の割合は、第1次調査、第2次調査、今回調査、それぞれ、66%、60%、94%である。

調査は学生各自に調査用紙を手渡し、無記名で回収した。調査項目への回答は、多肢の中から一番あてはまるものを一つ選ぶ方法によった。この方法は第1次調査、第2次調査と全く同じである。なお、調査用紙は本文末尾に掲載し、集計結果を記載した。

- (b) 実施時期：卒業の確定した学生が全員集合した2002年3月中旬の卒業手続日に実施した。前2回の調査は12月中旬に選択科目の授業時間を利用して実施している。保育者の就職決定時期は一般的に遅く12月以降翌年3月までに決まることも多い。就職が決まっていない学生の割合は、12月に実施した調査の方が明らかに多くなる。就職の差異によって回答内容に影響がでることは十分考えられるが、調査対象者を増やし正確を期すために実施時期を変更した。

(2) 第2次調査との質問項目の差異

調査用紙の問4においては、第2次調査同様に教科目に関して変更した。前2回の調査時には一般教育科目は人文・社会・自然の3分野と保健体育・外国語によって構成されていた。今回調査時には、一般教育科目の名称は基本教育科目に変更され、分野を厳格に3分野に限定することもなくなった。保健体育は開講すべきものではなく開講されていない。従って、今回調査では、基本教育科目と外国語のみとした。集計に当たっては、第1次調査、第2次調査の一般教育科目の3分野についてはそれぞれの回答数を合算し、基本教育科目に対応するものとした。社会体育実習が実習科目として新たに開設されたので学外実習の中を含めた。レクリエーション関連科目、パソコン関連科目、海外幼児教育関連科目も、新に開設されたので追加した。

調査用紙の問5においては、夏期研修会は廃止されたので削除した。幼児教育演習の1環として新に実施されたレクリエーション実技研修・実技発表会を追加し、単位化されていなかった時の名称であるゼミ活動は削除した。新に実施された音楽コースの演奏会、体育コースのキャンプ・スキー実習も追加した。

調査用紙の問6においては、第1次調査、第2次調査において学生がその他の回答として具体的に記述した内容を新たな項目として取り上げた。9.就職が決まらないこと、10.騒がしくて講義が十分に聞きとれなかったことの2項目がこれである。

調査用紙の問9は、1985年の音楽・体育コースの開設に伴いフェイス・シートとして追加した。以上の他に変更はなく、前回同様の調査用紙である。

3. 調査結果とその比較考察

以下においては今回の調査結果について報告し、必要に応じて第1次調査、第2次調査との比較考察を行うこととする。

(1) 学生が幼児教育科を選んだ理由

表1から明らかなように1と2の幼稚園・保育所の保育者になることを理由とする専門職指向型は今回調査では55%である。子どもを持った時の準備を理由とする準備教育型は6%、一般的な学習を目的とする学習型は3%である。子どもが好きを理由に入学してきた情緒指向型は今回調査では30%に達している。

準備教育型と情緒指向型の学生が、保育者になるという決断に至るまでにはかなりの距離がある。準備教育型では最終的に幼児教育科に不向きであると自己認識する者が46%に、情緒指向型では32%に達している。これに対し専門職指向型で最終的に不向きと自己認識する者は16%にとどまっている。

5から7のように親・先生などにすすめられたからとか、8の他にいきたい学科がなかったからとする消極型は5%であり、これは3回の調査において4~6%であり特段の変化はない。なお、消極型の中でもとりわけ他にいきたい学科がなかったことを理由にした者は、今回調査では5名であったが、そのうち4名は幼児教育科に不向きであると最終的に自己規定している。これは進路指導上の問題でもあるだろう。

以上のことから、ほとんど全ての者(95%)が積極的な理由で幼児教育科を選択しているといえよう。このような積極的な選択の理由は、第1次調査、第2次調査でそれぞれ97%、94%と高率を占め、幼児教育科の特性となっている。

専門職指向型は第1次調査、第2次調査、今回調査においてそれぞれ78%→72%→55%と減少し、それに対応するかの如くに情緒指向型が第1次調査、第2次調査、今回調査においてそれぞれ16%→10%→30%と増加している。幼児教育科入学生の専門職志向は確実に弱まっている。

表1 幼児教育科を選んだ理由

理由	類型	今回調査(N=193)	第2次調査(N=93)	第1次調査(N=80)
1. 幼稚園の先生になりたかったから	専門指向型	19%	46%	58%
2. 保育所などの保育士になりたかったから	〃	36%	26%	20%
3. 将来子どもを持ったとき、保育の知識・技術が必要になるから	準備教育型	6%	11%	0%
4. 子どもが好きだから	情緒指向型	30%	10%	16%
5. 親がすすめたから	消極型	1%	3%	1%
6. 学校の先生がすすめたから	〃	1%	0%	3%
7. 先輩や友人がすすめたから	〃	0%	0%	0%
8. 他にいきたい学科がなかったから	〃	3%	3%	0%
9. その他(幼児について勉強したい)	学習型	0%	1%	0%
10. その他(何らかの資格がほしい)	資格指向型	1%	0%	3%
11. その他(音楽・体育の勉強をしたい)	学習型	3%	0%	0%
12. その他	その他	3%	0%	0%
合計		103%	100%	101%

(2) - 1 学生の2年間の教育経験と満足感

図1は、教育課程の2年間にわたる履修過程での学生の満足度の変化を見たものである。この図から以下のことが明らかになる。

- (a) 2年間を通して満足している者は、第1次調査の11%が最も低く、第2次調査の42%が最も高く、今回調査では34%と減少している。
- (b) 2年間を通して不満足であった者は、全ての調査で2～5%の少数であり大きな変化はない。
- (c) 最終的に満足して卒業を迎えた者は、第1次調査、第2次調査、今回調査でそれぞれ56%、79%、86%であり、増加の傾向が見られる。
- (d) 図2は入学時と卒業時の満足感の推移についてのものである。この図から次のことが明らかになる。入学時の満足感は年度を経るごとに漸減している(64%→58%→56%)。にもかかわらず、卒業時の満足感年度を経るごとに増加している(56%→79%→86%)。しかし、いまだに14%の者が不満足を持って卒業している。これら学生が満足して卒業を迎えられるようにすることは、困難ではあるが今後の課題である。

図1 2年間の教育経験と満足感

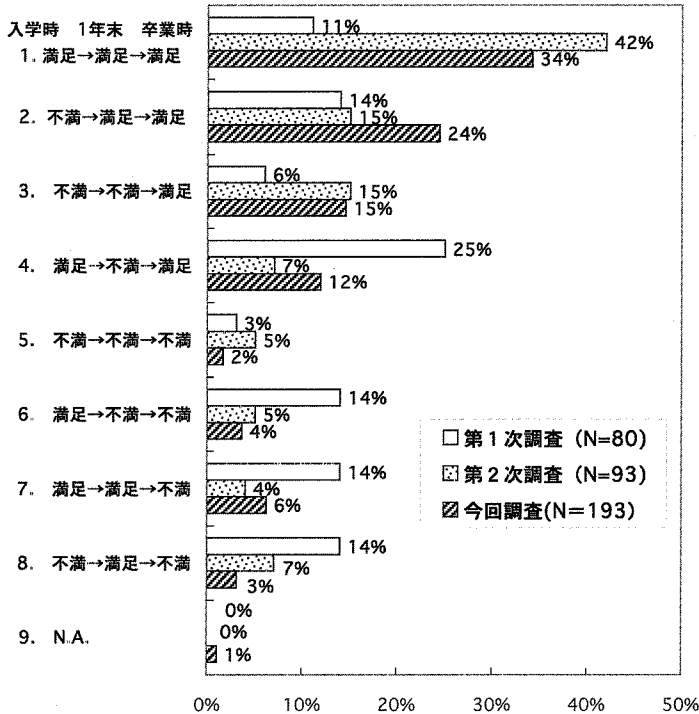
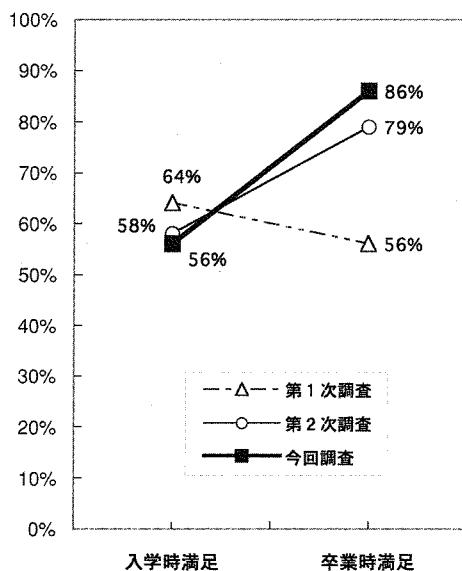


図2 入学・卒業時の満足感



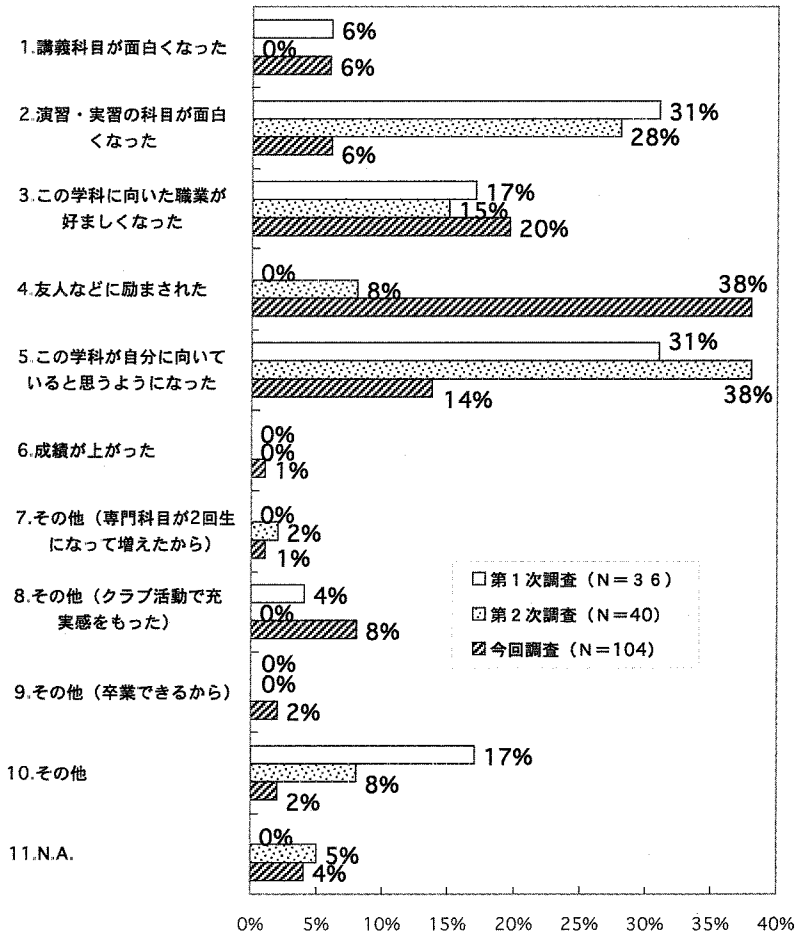
(2) - 2 満足へ変わったきっかけ

学生たちはどのようなきっかけで不満足から満足へ変わったのであろうか。図3は、図1の2・3・4・8を回答した者に対して不満足から満足へ変わったきっかけを問うた結果である。

- (a) 他人（主に友人）による励ましによってという友人関係が、満足感を持つようになるきっかけであるとする回答が最も多く38%に達している。これは前2回の調査と著しく異なる点である。第1次調査、第2次調査では、それぞれ0%、8%にすぎない。
- (b) この学科が自分に向いていると思うようになったという自己認識の変化が、満足感を持つようになるきっかけであるとする回答は14%にすぎない。これも前2回の調査と著しく異なる点である。第1次調査、第2次調査では、それぞれ31%、38%に達している。
- (c) 演習・実習の科目が面白くなったという学習上の理由が、満足感を持つようになるきっかけであるとする回答は6%にすぎない。これも前2回の調査と著しく異なる点である。第1次調査、第2次調査では、それぞれ31%、28%に達する。幼児教育科の教育課程の中核をなす演習・実習の科目は満足感を持つ主なきっかけにはもはやなり得ないということである。
- (d) 幼児教育科に向けた職業を好ましく思うようになったことが、満足感を持つようになるきっかけであるとする回答は15~20%で、いずれの調査においてもほぼ同じである。
- (e) クラブ活動で充実感をもったことがきっかけであるとする回答は8%であり、第1次調査、第2次調査ではそれぞれ4%、0%であり、増加している。

以上のことから、学科に対し満足感を学生が持つようにするためには、友人関係を円滑にする環境作りを教育課程の中になんらかのかたちで取り入れることが必要とされる事態に立ち至っていることが示されている。前2回の調査では個々の科目内容の充実や新たな科目の開設などによって教育課程の充実をはかることが満足感を持たせることにつながるとしていたが、それだけではもはや十分に対応できないということである。

図3 満足へ変わったきっかけ



(2) - 3 不満足へ変わったきっかけ

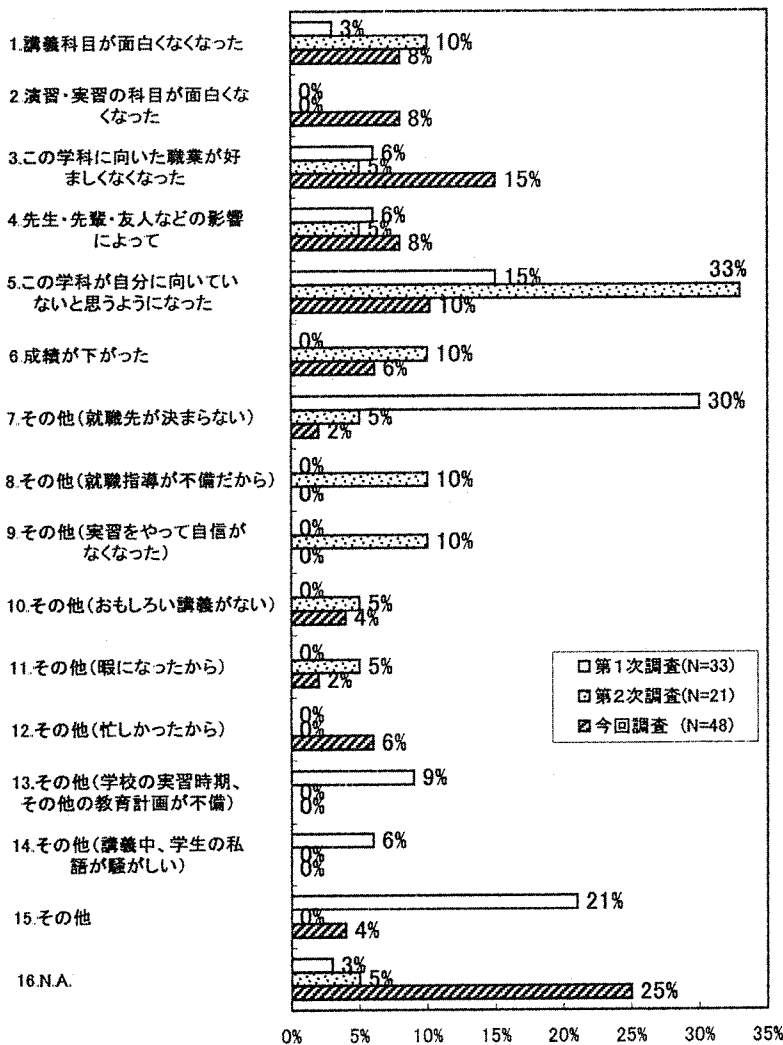
図4は、図1の4・6・7・8を選んだ者に対して満足から不満足へ変わったきっかけについて問うた結果である。

- (a) 最終的に卒業時に不満感を持つ者は15%と比較的少数であるが、在学中に満足感が不満感へ変わった経験を持つ者は25%に達している。(67%→13%→25%)
- (b) 幼児教育関係の職業を自分には向かないと思うようになったことを挙げる回答は

本学幼児教育科の教育課程に対する学生の意識調査(Ⅲ)

15%であり、第1次調査、第2次調査のそれぞれ6%、5%より増加している。友人関係などをきっかけに挙げる回答は8%である。幼児教育科に向かないと思うようになったとする回答は10%であり、第1次調査、第2次調査のそれぞれ15%、33%に比べ減少している。学外実習をやって自信をなくしたとする回答は今回調査では0%である。これらはいずれも本人に起因するものである。これらの総計は33%に達する。第1次調査、第2次調査ではそれぞれ27%、53%である。

図4 不満足へ変わったきっかけ

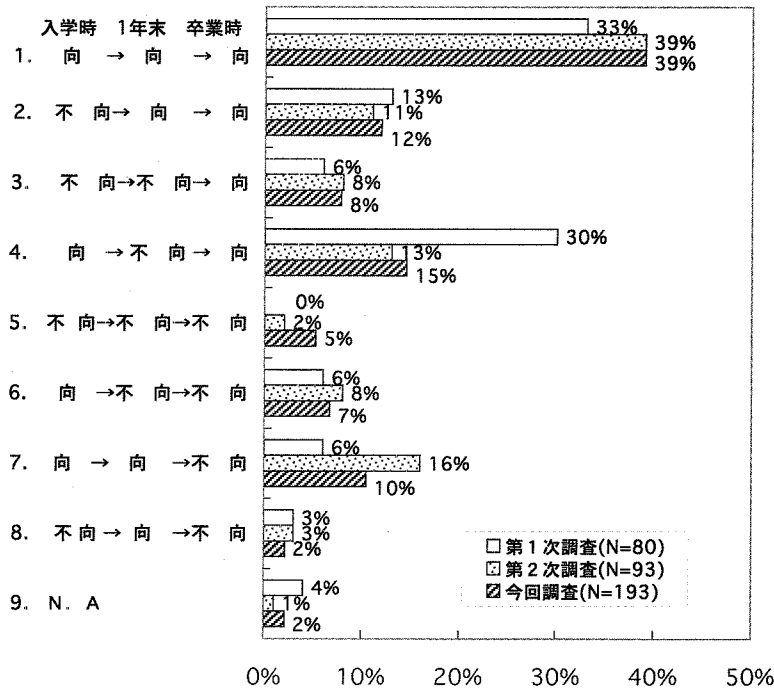


- (c) 不満足へ変わるきっかけのうち幼児教育科の教育課程に起因するものは、1. 講義科目が面白くなくなった8%、2. 演習・実習科目が面白くなくなった8%、10. おもしろい講義がない4%、13. 学校の実習時期・その他の教育計画が不備である0%、以上の4つであり、総計は20%である。第1次調査、第2次調査では、それぞれ12%、15%である。今回の増加の原因は、演習・実習科目がおもしろくなくなったという今までなかったきっかけをあげる回答が出てきたからである。13. 学校の実習時期・その他の教育計画が不備であるという選択肢は、開設当初のやむを得ない事情を意識して作成されたものである。したがって、今回調査での回答は第2次調査同様ゼロである。
- (d) 就職先が決まらなると就職指導が不備であるといった就職に関することは、不満足のきっかけとしては減少してきている。これは全体として進路指導体制が整備されたことと就職決定率が向上したことを反映している。(30%→15%→2%)
- (e) 無回答が25%に達していることも今回調査の顕著な特徴である。特にこれといったきっかけもなく何となく不満感を持ったということであろうか。

(3) - 1 学生の2年間の教育経験と適合感

図5は2年間にわたる学生生活を通しての幼児教育科に対する適合感を問うた結果である。この図から以下のことが明らかになる。

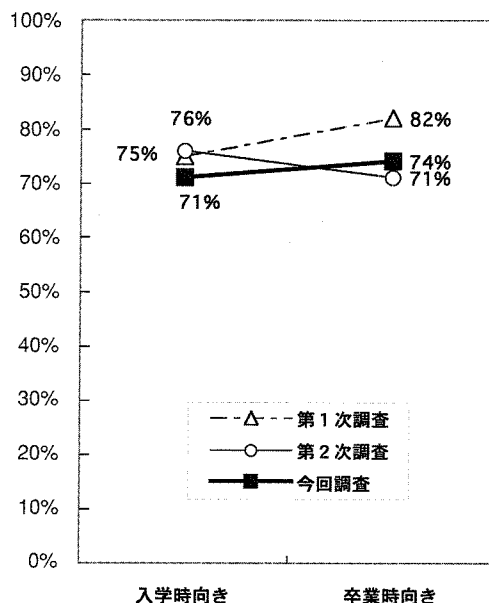
図5 2年間の教育経験と適合感



本学幼児教育科の教育課程に対する学生の意識調査(Ⅲ)

- (a) 向→不向、不向→向と適合感に変化を示したケースは、全ケースの36%である。調査ごとに50%→46%→36%と変化のケースは減少してきている。これは学生が学科への適合に関して幾分かは相対的に安定してきていることを示している。
- (b) 図6に見られるように、向き不向きの適合感は入学時と卒業時はほぼ同じであり、2年間の教育を受けることによって変化することはあまりない。入学時と卒業時の満足感が2年間の教育を受けることによって変化するのは異なっている。
- (c) 入学以来一貫して向いていたとする回答39%と卒業時に向いていたとする回答35%とを合わせると74%に達する。幼児教育科への学生の最終的な適合感は、7割以上を維持しており総じて高いといえよう。(82%→71%→74%)
- (d) 入学以来向いていたとする回答39%と入学以来不向きとする回答5%との一貫型の回答は44%に達する。これは調査ごとに33%→41%→44%と微増している。
- (e) 向→不向→向と変化した回答は15%であり、調査ごとに変動を示している。(30%→13%→15%)
- (f) 入学以来一貫して不向きとする回答は5%であり、微増している。(0%→2%→5%) 入学の当初から一貫して幼児教育科が不向きとする回答は、進路選択の誤りであって受け入れ側としては如何ともしがたい面もあるが、こうした学生を何とか学科の一員として卒業させることは困難ではあるが今後の課題であろう。
- (g) 卒業時になって初めて不向きに変わった者は10%であり、これも調査ごとに多少変化している。(6%→16%→10%) なお、これは第2次調査報告でも述べたことであるが、学生が卒業時に幼児教育科に不向きであると自覚することは、教育課程の観

図6 入学・卒業時の適合感



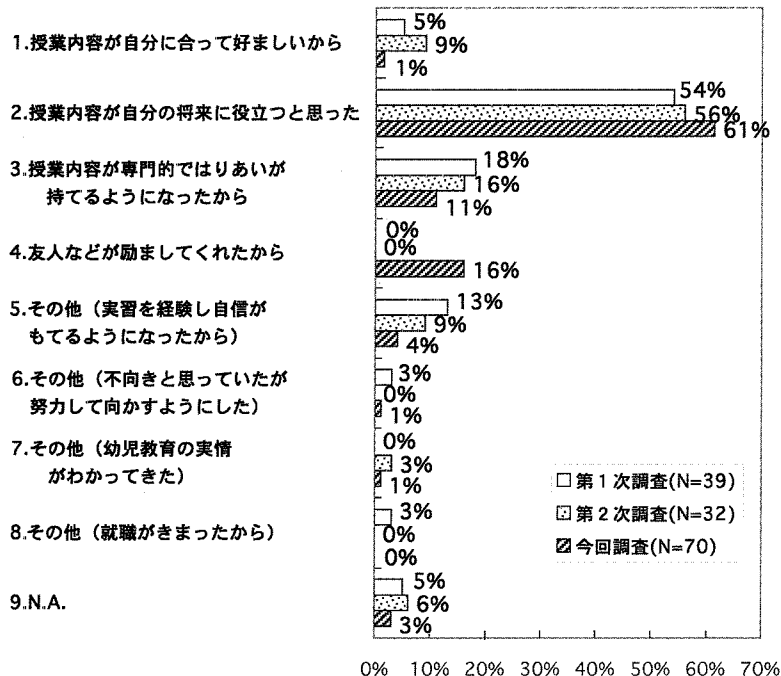
点からは必ずしもマイナスに評価されるべきことではない。これは、不向きと判断したきっかけを検討すれば明らかになるように、2年間の教育を通して自己の適性を正確に把握できるようになったことを意味しているからである。

(3) - 2 学科に向くようになったきっかけ

図7は、どのようなことをきっかけにして学科に対し不向きから向きへ変わったかを示すものである。図5で2・3・4・8を選んだ者についてのものであり、37%の者がこれに該当する。

- (a) 学生が学科に向くようになるきっかけのうち教育課程に関わるものは、1・2・3・5・7である。これらのきっかけは、総計78%に達する。第1次調査、第2次調査ではそれぞれ90%、93%である。学生が幼児教育に不向きであるとする自己認識を変えるきっかけは、幼児教育科が提供する教科目の内容である。不向きから向きへ変わった者のほとんどは、幼児教育科の開講科目の講義、実習科目などを履修する中で自らも努力して自分を幼児教育に向けた者に変革していったのであろう。学生の学科への適合感の向上という観点において教育課程の内容の充実を図ることの意味は大きい。
- (b) 学科へ向くようになったきっかけのうち、友人などの励ましをあげた者が16%いた。これは、第1次調査、第2次調査においてはそれぞれ0%であった。友人などの励

図7 学科に向くようになったきっかけ



本学幼児教育科の教育課程に対する学生の意識調査(Ⅲ)

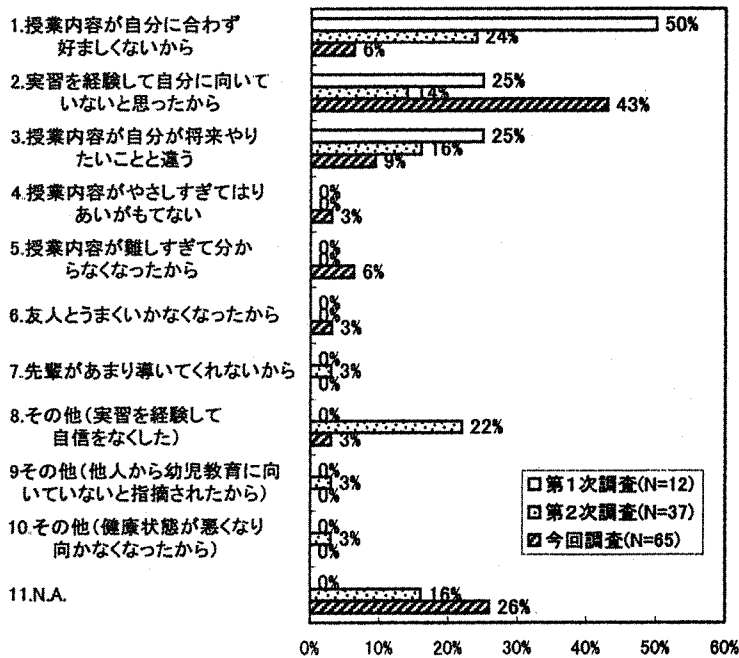
ましが満足へ変わったきっかけであるとする回答が今回調査で38%の高率を占めたことと同じ現象である。好ましい友人関係の形成は、教育課程以外の影響をあまり受けない適合感にも影響を与え始めていることが読みとれる。

(3) - 3 学科に不向きになったきっかけ

図8はどのようなことをきっかけにして、学科に対し向きから不向きへ変わったかを示すものである。図4で4・6・7・8を選んだ者についてのものであり、34%の者がこれに該当する。

(a) 授業内容が自分に合わないとか自分の将来やりたいことと合わないからというきっかけをあげる回答は15%である。第1次調査、第2次調査においてはそれぞれ75%、40%に達している。学外実習以外の教科目が学生の不適合感に与える影響力は減少してきている。

図8 学科が不向きであると思ったきっかけ



注：第1次調査では、図5の向→不向→向に回答したものの24名が含まれていない。

- (b) 学外実習を経験して幼児教育の現場に触れて初めて、自己の幼児教育への不適合を自覚したとの回答は43%に達している。第1次調査、第2次調査においてはそれぞれ25%、14%であり、激増している。
- (c) 授業内容と学外実習を通して幼児教育科が自分には合わないと自覚するという事は、学習の結果であり否定的にとらえることではない。学生が自己の適性を正確に把握できるようになったということである。授業内容と学外実習をきっかけにして自己の不適合感を確認した割合は、第1次調査、第2次調査、今回調査でそれぞれ100%、54%、58%に達する。
- (d) 学外実習を経験して幼児教育の現場に触れて自信喪失する者は3%であり、第2次調査22%からは激減している。こうした学生を出さないようにすることは、今後の課題である。
- (e) 授業内容が簡単すぎるとする回答、また逆に授業内容が難しすぎるとする回答、それぞれ3%、6%の計9%は、第1次調査、第2次調査には全く見られなかったことである。これはおそらく学生の学力の格差が拡大したことの反映であろう。
- (f) 無回答が26%と増加している。不適合感についても不満感同様、なんとなく不適合感を抱いている者が増加している現れであろう。

(4) 幼児教育科学生の満足感・適合感から見た学生類型

幼児教育科に対する卒業時の満足感と適合感の双方に回答した者をクロスさせることによって、満足感・適合感から見た学生類型とその問題点を考察することができる。図9は縦軸に満足感、横軸に適合感をとって学生類型を現している。

第1の学生類型は、学科に適合感を持ちかつ学科に満足感を持つものである。学科に適合していると思い、その適合した学科に満足しているのであるから、この第1の学生類型は、目的一致充実型といえよう。幼児教育科生としては理想的な学生類型である。この類型の学生は、図10から明らかなように第1次調査、第2次調査、今回調査でそれぞれ56%、62%、68%であり、漸増している。この類型に属する学生からの幼児教育科に対する問題点の指摘はない。幼児教育科は、この類型の学生から合格点を一応得ることができたといえよう。

第2の学生類型は、学科に適合していないにもかかわらず、学科に満足しているとするものである。自分が適合感を持っていないところで満足感を得るのは難しい。にもかかわらず満足感を持つということは、適合しないものの学科における学生生活は楽しんでいるということであろう。この類型は自分の不適合感を不満感にまで拡大させず納得して受け入れている本人納得型といえよう。このような学生類型は、大学がなんらかの意味で学生にとって肯定的なものでないと出現しないだろう。この類型の学生は第1次調査においては配分不明であるが、第2次調査、今回調査ではそれぞれ15%、19%と増加している。

表2は、この類型の学生の中で不満から満足へ変わったきっかけについてのものである。表2から明らかなように本人納得型の学生が、不満感を募らせ進路不適切型にならなかった最大の理由は、友人などの励ましであり、教育課程の是非によるものはわずかである。

本学幼児教育科の教育課程に対する学生の意識調査(Ⅲ)

この事実は、今後の幼児教育科のあり方を考えるうえで重要である。

第3の学生類型は、学科に不適合感を持ちかつ学科に不満感を持つものである。この類型の学生は、不適合感と不満感が相互補強しながら学生生活を過ごすもので進路不適切型といえよう。全てが本人の進路選択の誤りであると断定できる訳ではないが、この類型の学生に対する指導は最も困難なものとなる。大学は教育課程を受け入れ自ら学ぶ意志を持つ者に対して用意され、講義などもそれを前提として実施されている。はじめから不向きと思い不満を抱いている学生に対しては、なすすべを知らないというべきだろう。この類型の学生は、第2次調査、今回調査ではそれぞれ14%、6%と半減している。しかしながら、今後ともこの類型の学生は少数ながら必ず入学してくる。こうした学生への対応方法についても検討しておく必要はあるだろう。

第4の学生類型は幼児教育科に適合感を持つにもかかわらず、学科に対しては不満感を抱く学生類型である。幼児教育には適していると思っているにもかかわらず満足感を得ることができなかったこの類型は、本学幼児教育科に失望した期待はずれ型といえよう。この類型の学生は、第1次調査、第2次調査、今回調査でそれぞれ29%、8%、7%である。第1次調査以降は激減してきたが、期待はずれ型の学生が7%もいる事態は深刻である。今回調査ではこの類型の学生13名中9名の学生が入学以来一貫して幼児教育科に適合感を持ち続けた者であり、文字通り期待に応えられなかった責任は重い。

表3は、期待はずれ型に属する13名の内、一貫して不満感を持ち続けた1名を除く12名の学生が満足から不満足に変わったきっかけを示したものである。この中で授業に関わるものは、「講義科目・演習科目・実習科目が面白くなかった」「おもしろい講義がない」「忙しかった」「成績が下がった」であり、第2次調査、今回調査ではそれぞれ7名中の4名、12名中の半数の6名に達している。とくに今回調査の回答においては、無回答の5名と幼児教育科が自分には向いていないという1名の不満足の原因を除けば、全てがなんらかの意味において授業に関わるものである。

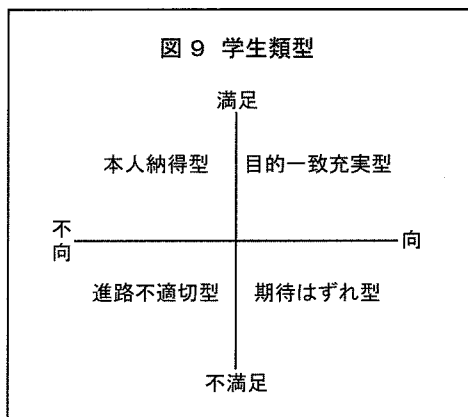
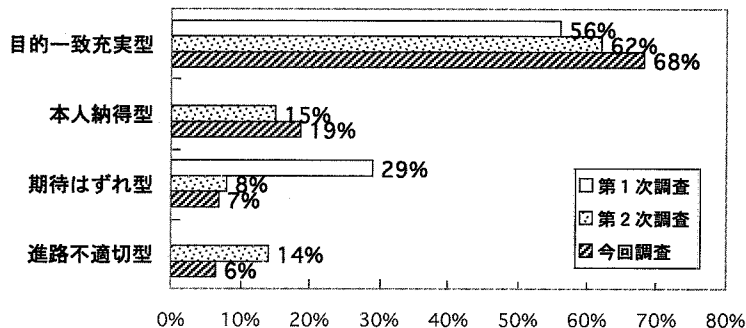


図10 満足感と適合感からみた学生類型



注：第1次調査の本人納得型・進路不適切型の計16%の配分不明

表2 本人納得型学生の満足に変わったきっかけ

きっかけ	今回調査(度数)
講義の学習が面白くなった	1
演習・実習が面白くなった	1
この学科に向けた職業が好ましくなった	3
友人などに励まされた	9
学科が自分に向いていると思うようになった	2
クラブ活動で充実感をもった	3
N. A.	1
合計	20

表3 期待はずれ型学生の不満に変わったきっかけ

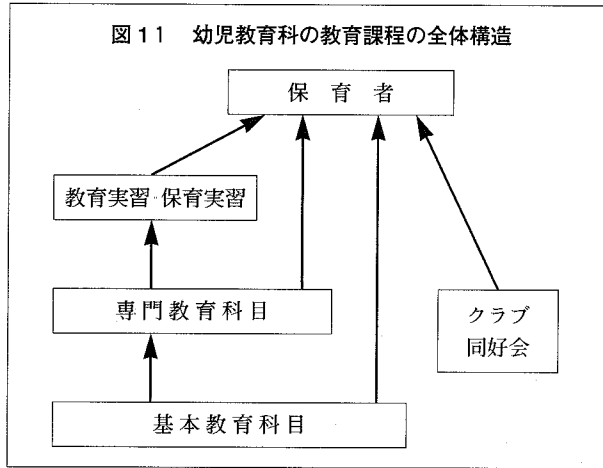
きっかけ	今回調査(度数)	第2次調査(度数)
講義科目が面白くなくなった	2	1
演習・実習科目が面白くなくなった	2	0
この学科に向けた職業を好ましいと思わなくなった	0	1
先生・先輩・友人の影響によって	0	1
この学科が自分に向いていないと思うようになった	1	0
成績が下がった	0	2
就職指導が不備だから	0	2
面白い講義がない	1	0
忙しかったから	1	0
N. A.	5	0
合計	12	7

(5) -1 教科目に対する取り組み

学生の教科目に対する取り組みについては、(1) どの教科目に対して一番重点を置いたか、(2) どの教科目が一番楽しかったか、(3) 一番苦しかったか、(4) 一番役立ったか、(5) 一番勉強になったかの5項目について問うた。

幼児教育科の教育課程は、図11のような全体構造を持っている。教科目は、幼稚園教員免許状、保育士資格の取得に必要とされる科目群によって構成されている。これは本学幼児教育科に限ったことではなく、幼保同時養成に関係している教育機関に共通することである。個々の教科目が時代の変化の中でどのように改変されても、保育者養成教育の原則が変更されない限り図11に示された教育課程の全体構造は不変である。教育課程の全体構造と質問事項の関係は以下ようになる。

- (a) 最重要教科目については、保育者になることを最終的に設定すれば、学外実習に最重要点を置かざるを得ないであろう。また、学外実習をスムーズに履修することを当面の目標に設定したり、個々の教科目の履修を目的に設定したりする場合には、個々の専門教科目に最重要点は移行する。専門教科目のどれに最重要点をおくかは学生の得手・不得手、学外実習に対する教科目の実践的意味合いの強弱、教科目に対する関心のあり方などに左右され、全体構造とは無関係になる。
- (b) なにを楽しいとするか、なにを苦しいとするかは、全く個々の学生の趣味の領域の問題であって回答は各教科目に均等になり、特定教科目に集中する度合いは少ない。万一、特定科目に集中するようなことがあれば、その教科目がそうした一般的性格を持つからであり、教育課程の全体構造とは無関係である。
- (c) 役立つとの判断は、なにに対して役立つのかの基準の取り方によって異なるものとなる。保育者になるために役立つことを基準とするならば学外実習が、学外実習をうまく履修することに基準をおくならば専門教科目が選択の対象になるだろう。もっとも、学外実習をうまく履修することは、保育者になる目標に包摂されるので、この回答は比較的学外実習へ集中するだろう。
- (d) 勉強になったとの判断もなにを基準にするかによって異なったものとなる。この間には、保育者になるためにということが暗に含まれている。従って、保育者になるために勉強になったのはなにかと意味が限定されることになり、回答が学外実習へ集中する度合いが最も大きくなるはずである。
- (e) 役立つ教科目、勉強になった教科目として学外実習が選ばれる割合が高くなるほど教育課程全体としての働きは充実していると言えよう。他の教科目が選ばれないということは、その教科目が役立たないことでも意味がないということでもない。学外実習以外の専門教科目の構造的位置づけは、学生が実習を有意義に履修できるようにすること、専門教育科目の知識・技能が学外実習において検証・確認・応用され、その課題の発見がなされることにある。従って、専門教育科目がその役割を十全に果たすということは、学外実習が学生にとって有意義なものになるということである。



(5) - 2 - 1 取り組みの実際 —重点教科目—

表 4 は、学生の教科目に対する取り組みを重点・楽しみ・苦しみ・役立つ・勉強になったという観点から調査した結果をまとめたものである。学生が重点を置いた教科目については以下のことが明らかになる。

表 4 教科目等に対する学生の取り組みの実際

	今回調査(N=193)					第2次調査(N=93)					第1次調査(N=80)				
	重点	楽しみ	苦しみ	役立つ	勉強	重点	楽しみ	苦しみ	役立つ	勉強	重点	楽しみ	苦しみ	役立つ	
基本教育科目	6%	1%	13%	2%	2%	0%	1%	5%	0%	1%	0%	1%	24%	0%	
外国語科目	0%	2%	12%	1%	3%	0%	0%	15%	0%	1%	0%	1%	20%	0%	
保健体育	—	—	—	—	—	0%	3%	0%	0%	0%	0%	4%	0%	0%	
専門教育科目	保育・教育	10%	3%	4%	8%	5%	9%	1%	0%	3%	5%	24%	0%	0%	4%
	心理	4%	4%	6%	3%	5%	4%	3%	1%	3%	6%	5%	4%	3%	0%
	福祉	1%	0%	3%	0%	1%	2%	0%	2%	1%	1%	0%	3%	4%	0%
	保健	1%	0%	1%	4%	6%	0%	0%	1%	8%	2%	1%	1%	1%	10%
	保育内容	7%	1%	1%	7%	3%	6%	0%	1%	1%	2%	16%	1%	1%	9%
	音楽	7%	9%	4%	6%	3%	13%	6%	13%	6%	4%	11%	10%	11%	4%
	美術	2%	7%	1%	1%	2%	2%	18%	2%	6%	5%	1%	11%	0%	0%
	体育	6%	21%	3%	1%	2%	1%	9%	1%	0%	1%	0%	5%	0%	0%
	教科	1%	0%	2%	2%	2%	5%	1%	0%	1%	1%	6%	0%	0%	3%
	幼児文化	1%	2%	0%	6%	4%	0%	2%	0%	3%	0%	—	—	—	—
	幼児教育演習	2%	13%	1%	1%	2%	1%	12%	1%	6%	2%	—	—	—	—
	レクリエーション	0%	4%	1%	0%	3%	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	パソコン	0%	4%	8%	5%	2%	—	—	—	—	—	—	—	—	—
海外研修	0%	4%	1%	2%	1%	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
教育・保育実習	40%	18%	32%	48%	50%	54%	39%	57%	58%	67%	31%	31%	31%	66%	
クラブ・同好会	2%	4%	1%	1%	1%	0%	1%	0%	1%	0%	3%	21%	1%	4%	
その他	0%	0%	1%	0%	0%	2%	3%	0%	1%	0%	0%	1%	3%	0%	
N. A.	10%	5%	9%	5%	7%	0%	0%	0%	0%	0%	1%	4%	3%	1%	
合計	100%	102%	104%	103%	104%	99%	99%	99%	98%	98%	99%	98%	102%	101%	

本学幼児教育科の教育課程に対する学生の意識調査(Ⅲ)

- (a) 第1次調査においては教職科目(教育・心理)、実技系科目(保育内容・音楽・美術・体育)、学外実習に対する重点の置き方は、それぞれ29%、28%、31%であり、ほぼ等しかった。学外実習を核にして構造化されている教科目に対し学生が無構造的に重点を置いていたことの現れである。第2次調査ではこの三者に対する重点は、13%、22%、54%となり、学生の重点の置き方が教育課程の構造化に対応するようになってきている。しかし、今回調査においては、この三者に対する重点が14%、22%、40%となり、学外実習に対する重点は40%へ減少し、全体的には構造化は第2次調査時点と比べて実現していない。
- (b) 基本教育科目に重点を置く者は、前2回の調査では見られなかったが、今回調査では6%現れた。これは明らかに単位修得を目的にしたものである。また、無回答も9%に達している。重点の置き方の無構造化が教科目全体に拡がり始めていることの現れである。

(5) - 2 - 2 取り組みの実際 —楽しみ教科目—

- (a) 学生が楽しみにしている教科目の中で5%以上の回答を得ている教科目は次の通りである。第1次調査では学外実習31%、クラブ・同好会21%、美術11%、音楽10%、体育5%である。第2次調査では学外実習39%、美術18%、幼児教育演習12%、体育9%、音楽6%である。今回調査では体育21%、学外実習18%、幼児教育演習13%、音楽9%、美術7%である。
- (b) 学外実習を楽しみとする回答は、31%、39%、18%と今回調査では激減している。
- (c) 体育関連科目が、今回調査で初めて学外実習以上に楽しみの対象教科目としてあげられている。授業それ自体が学生にとって文字通り意味深く楽しいものだったのだろう。
- (d) 開設当初、幼児教育演習は正規の授業ではなく、授業の合間を見て実習に備えて実技発表や実技研修などを全教員が担当して実施していた。その後、単位の無い「幼児教育演習」として時間割上に1コマ分の時間を確保し実施し、1988年になって「幼児教育演習Ⅰ・Ⅱ」各2単位の学科必修科目として開設された。1990年から教員免許法の改正に伴い教職科目の指導法に関する教科目に位置づけられ、さらに2000年から教員免許法の改正に伴い教職科目の「総合演習」に関する教科目として位置づけられ今日に至っている。内容的には実技研修・自主運営による実技発表・夏期研修などによって構成されている。この教科目を楽しみの筆頭にあげる回答も多い。
- (e) 楽しみにあげられる教科目はいずれも実践的内容を主とする教科目である。少人数で実際に自分で経験しつつ実施される上に、保育者にとって不可欠な教科目である。

(5) - 2 - 3 取り組みの実際 —苦しみ教科目—

- (a) 苦しみ教科目として10%を越えるものは、学外実習32%、基本教育科目13%、外国語12%である。学外実習は常に高率を示し第1次調査、第2次調査でもそれぞれ31%、57%である。
- (b) 基本教育科目は、第1次調査、第2次調査時には一般教育科目とされていた教科目

- であり、それぞれ24%、5%であった。
- (c) 基本教育科目が苦しみ教科目として10%を越えて再登場したのに対し、音楽は苦しみ教科目として回答するものが11%、13%、4%となり激減した。音楽を楽しく学べるようにする努力の成果が実ったものというべきであろう。
- (d) 第2次調査報告では外国語について「文学的要素の強い外国語教育はやめ、幼児教育の実践とのつながりを求めた実用外国語学習に変更するなり、選択にするなりの工夫が必要なのではないか」^(註1)と指摘している。国際化が叫ばれ、幼児教育の現場にも多彩な国籍を持つ幼児の入園が見られる現状の中では、この後半部分が指摘する外国語の選択科目化は、今となっては望ましいものではない。この指摘の前半部分はすでに実現され、外国語は幼児教育に関わる内容に改変されている。にもかかわらず、外国語を苦しみ科目とする回答は20%、15%、12%と多少は減少傾向を示しているものの依然として高率である。学生にとって外国語はこうした工夫では乗り越えられない困難さを内包しているのかもしれない。
- (e) 苦しさの意味するところは教科目によって異なっている。表5は苦しいと回答した学生がその同じ教科目に対する重点・楽しさ・役立つ・勉強になったという問に対しどのように回答したかを見たものである。学外実習は苦しみ教科目とされながらも、その内の48%の者が重点を置き、23%の者が楽しいとし、64%の者が役立ったとし、59%の者が勉強になったと肯定的に回答している。第2次調査ではこれが、それぞれ64%、52%、75%、75%と高率を示している。学外実習は減少傾向を示すといえども多くの観点から肯定的な回答を得ている。
- (f) これに対して基本教育科目と外国語の二つは、苦しいとした者の内で重点を置いたとする回答はそれぞれ4%、0%、楽しいとした回答は0%、4%、役立ったとする回答はなく、勉強になったとする回答は0%、4%にすぎない。現状ではただ苦しいだけの教科目として受け取られている。教育内容に一層の工夫と保育者養成教育

表5 苦しみ科目に対する質問項目別回答

学生数	回答	度数	%
実習を苦しいとした学生 (61名)	実習に重点をおいた	29	48
	実習を楽しみにした	14	23
	実習が役立った	39	64
	実習は勉強になった	36	59
基本教育科目を苦しいとした学生 (25名)	基本教育科目に重点をおいた	1	4
	基本教育科目を楽しみにした	0	0
	基本教育科目が役立った	0	0
	基本教育科目は勉強になった	0	0
外国語を苦しいとした学生 (23名)	外国語に重点をおいた	0	0
	外国語を楽しみにした	1	4
	外国語が役立った	0	0
	外国語は勉強になった	1	4

における意義の再検討が必要だろう。

(5) - 2 - 4 取り組みの実際 —役立つ教科目—

- (a) 学外実習が役立つとした回答は、第1次調査、第2次調査、今回調査においてそれぞれ66%、58%、48%であり、漸減しているがなお高率を保ち、教育課程の全体構造によく対応している。
- (b) 保育内容の研究に関する教科目は、その性格を考えれば、学外実習において検証・確認・応用される知識・技能の第一に挙げられてもおかしくはない。役立つ教科目との回答は9%、1%、7%と今回調査では増加したが、全体としてやや低い。
- (c) 音楽は学生がピアノの演奏を通して頭を悩ませる教科目であり、学外実習においても一度や二度は子どもの前で弾く機会を持ったはずである。にもかかわらず、11%、6%、6%とそれほどの高率を示しているわけではない。
- (d) 教職科目(教育・心理)は、4%、6%、11%と漸増してきている。保育者としてのバックボーンを担当する教科目であり、元来、役に立つという功利的な回答を得にくい教科目である。
- (e) 実技系科目の音楽・美術・体育に対する回答は、11%、12%、8%と漸減している。これらの教科目が役に立つと言われている割には意外に低率である。体育は楽しみの教科目として21%の回答を得ているにも関わらず、役立つとの回答は1%に過ぎない。理由の解明は今後の課題である。

(5) - 2 - 5 取り組みの実際 —勉強になった教科目—

- (a) 学外実習は、役立つという功利的な回答よりも勉強になったという内在的な回答を選択する者の方が多い。第1次調査にはこの質問項目は無かった。第2次調査、今回調査においてはそれぞれ67%、50%に達している。勉強になったとの観点からの場合が最も学外実習に回答が集中し、教育課程の全体構造に対応している。教育課程の構造は学ぶ観点で構築されたものであり、それが学ぶ観点から最も多く勉強になったと回答されるのは当然といえば当然である。
- (b) 学外実習以外の教科目は全て、1%~6%の範囲で一番勉強になったと回答されている。

(6) 大学生生活の印象

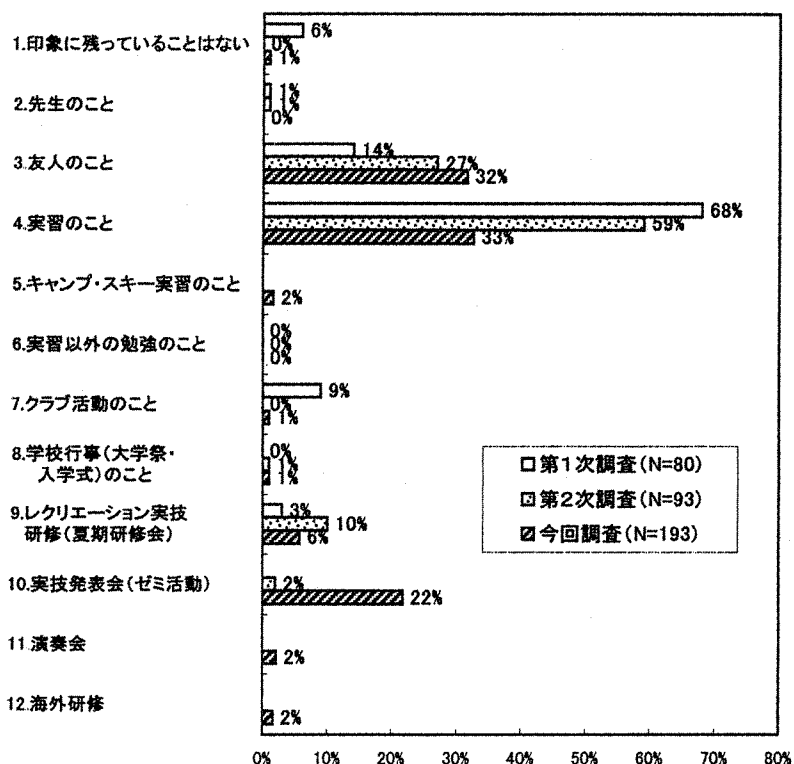
図12は、大学生生活で一番印象に残っているできごとについて問うた結果である。幼児教育演習は、レクリエーション実技研修・実技発表・ゼミ活動などで構成されている。従って考察にあたっては、回答項目にあるレクリエーション実技研修と実技発表は、まとめて幼児教育演習として取り扱うこととする。

今回調査では友人のこと32%、学外実習のこと33%、幼児教育演習のこと28%となり、印象に残ったことはこれらが3本柱になっている。大学生生活が幅広く印象深いものになってきていることを窺い知ることができる。

これに対し、第1次調査では68%の学外実習のことが、2番目の友人のことが14%、3番目のクラブ活動のことが9%を圧倒している。第2次調査においても59%の学外実習のことが、2番目の友人のことが27%、3番目の幼児教育演習のことが12%を圧倒している。その上、第1次調査では友人とクラブという幼児教育科の教育課程と直接関係のないものが上位に選ばれている。第2次調査においては教育課程と直接関係ないものは友人だけとなり、クラブに代わり幼児教育演習が12%の低率ながら3番目に登場している。

第2次調査報告では学外実習の圧倒的高率をうけて「やはり、学生生活を最も印象づけたものは実習であって、59%にも達している。第一次調査も同様に最高であって68%に達している。実習がこれほどまでの影響力を学生生活に及ぼすことは学校として十分に認識しなければならない。」^(註2)としている。この指摘は誤りではないが、今回調査の結果を見ると一面的な見方であったと言わなければならない。大学生生活で印象に残ったことが学

図12 大学生生活の印象

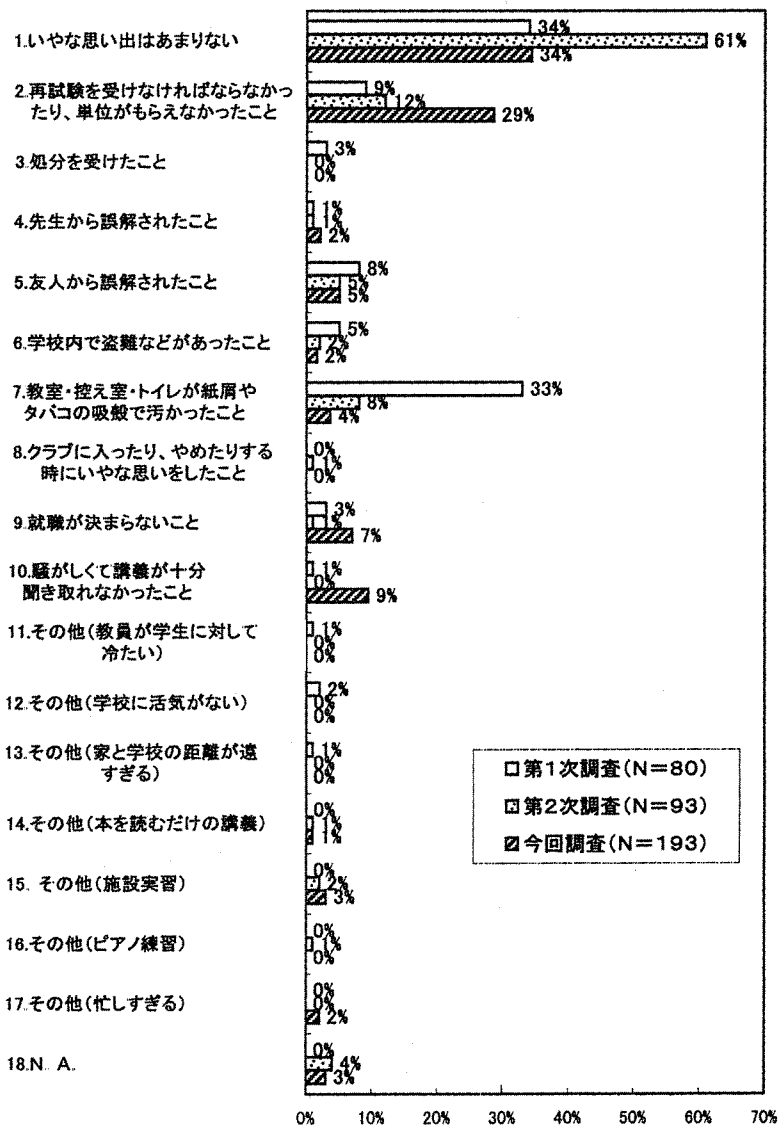


外実習に集中していたのは、学生生活を印象深いものにする機会の提供が不足していたという一面もあると認めざるを得ないからである。

(7) 大学生生活で一番いやなこと

- (a) 図13は大学生生活で一番いやなことについて問うた結果である。いやな思い出はあまりないとする回答は第1次調査、第2次調査、今回調査でそれぞれ34%、61%、34%である。今回調査は第1次調査と同率であり、いやなことがあまりなかったとする回答の割合は半減した。いやな思い出をあまり持たない者の中で幼児教育科に満足感を持って卒業する者は91%、不満感を持って卒業する者は9%である。いやな思い出を持つ者の中で幼児教育科に満足感を持って卒業する者は83%、不満感を持って卒業する者は17%である。いやな思い出を持つ者の方が学科に対し不満感を持つ割合は高いが、顕著な差があるということではない。
- (b) いやなことがあるとする回答は、第2次調査と比べると倍増した。第2次調査と比べての基本的な変化は、再試験や単位がもらえなかったことがいやだったとする回答(9%→29%)、講義が騒がしくて聞き取れなかったことがいやだったとする回答(0→9%)、就職が決まらないことがいやだったとする回答(1%→7%)が増加したことである。
- (c) いやなことがあったとする回答は、第1次調査と同率であるが内容は大きく異なる。第1次調査では教室の汚さが主な回答であったが、今回調査では教科目に関するものが主な回答となっている。
- (d) いやなことの中で教科目に関することは、2.再試験を受けなければならなかったり、単位がもらえなかったこと29%、10.講義が騒がしくて聞き取れなかったこと9%、14.本を読むだけの講義1%、15.施設実習3%、17.忙しすぎる2%、以上の5項目である。これら5項目の合計は44%に達する。第1次調査、第2次調査においては教科目に関することは、それぞれ10%、16%にすぎない。再試験や単位がもらえなかったことについては、第1次調査、第2次調査では9%、12%であったのが29%と激増している。単に不合格になったということではなく、不合格を納得できない事態が発生しているということであろう。講義中の私語については従来講義をする教員サイドの問題として論議されてきたが、9%の学生も私語が一番いやなこととしている。第1次調査、第2次調査ではそれぞれ1%、0%にすぎない。施設実習をいやなこととする回答は、本人の受講姿勢の問題であってなんともコメントのしようがない。
- (e) 就職が決まらないことをいやなこととして挙げる回答は7%である。第1次調査、第2次調査ではそれぞれ3%、1%にすぎず、多少増加している。ただし、就職が決まらないことを理由にして学科に対する不満感を持つ者は2%に過ぎない。
- (f) 教室が汚いことをいやなこととしている回答は、33%、8%、4%と今回調査では半減している。学校側が施設設備の充実・清掃業者の導入に尽力した結果であろう。

図13 大学生生活で一番いやなこと



(8) - 1 やめたいと思ったことの有無

- (a) 図14は、幼児教育科に在学中にやめたいと思ったことの有無についての結果である。やめたいと思ったことがあるとする回答は37%に達し、第1次調査、第2次調査のそれぞれ35%、22%と比べ増加している。4割近くにも達する学生がやめたいと思ったことがあるという事実を認識して講義をしている教員はいないだろう。講義は全ての学生がそれを学ぶ気持ちがあることを前提にして始められる。数字的には足元が崩壊する思いであるが、実際の所はどうなのだろうか。
- (b) やめたいと思った者の卒業時の学生類型は、図15の通りである。今回調査においては、卒業時に目的一致充実型になる57%の学生は、やめたいと思ったものの卒業時には問題なく本学幼児教育科生として卒業している。26%の本人納得型の学生も事態を納得して満足して卒業を迎えている。やめたいと思った者の実に83%の者が本学幼児教育科に対して満足感を持って卒業していることになる。第2次調査では本学幼児教育科に対して満足感を持って卒業した者は、やめたいと思った者の55%にすぎない。
- (c) 第2次調査においては、進路不適切型が40%、期待はずれ型が5%であった。これら2類型の計45%に達する者は、やめたいと思ひ最後まで本学幼児教育科に対する満

図14 やめたいと思ったことの有無

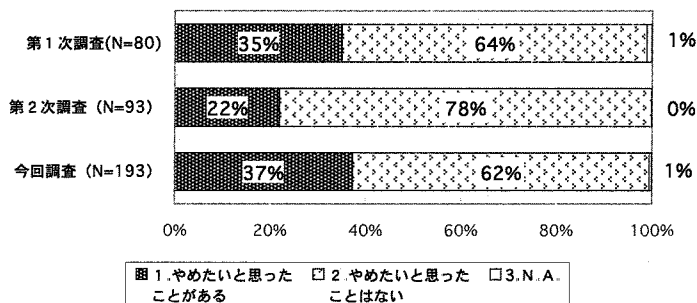
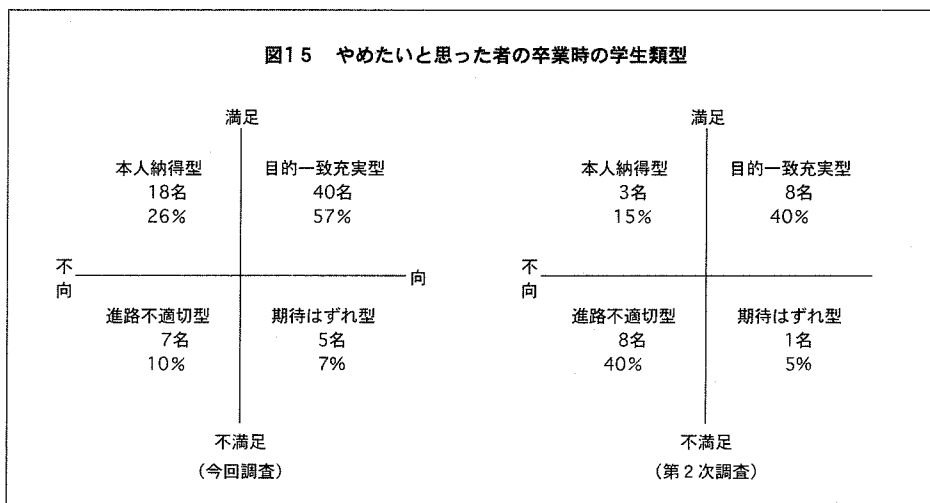


図15 やめたいと思った者の卒業時の学生類型

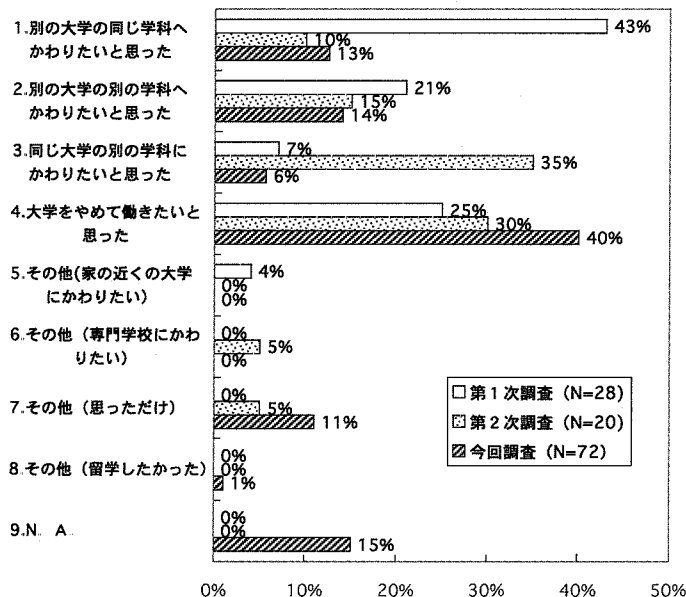


足感を持ってないまま卒業していた。今回調査においてはやめたいと思った者の卒業時の学生類型は、進路不適切型が10%、期待はずれ型が7%である。これら2類型の計17%の者は、やめたいと思いつい最後まで本学幼児教育科に対する満足感を持って卒業を迎えることができなかつたことになる。

(8) - 2 やめたいと思つたことの内訳

- (a) 図16は、やめたいと思つたことの内訳についてのものである。別の大学の同じ学科にかわりたと思われたということは、本学幼児教育科が全く学生の期待に応えられないと認識されたことを意味する。今回調査では別の大学の同じ学科にかわりたとする回答は13%であり、第1次調査、第2次調査ではそれぞれ43%、10%であり、第1次調査以降は激減している。この回答をした学生9名中7名は卒業時において目的一致充実型、1名は期待はずれ型に属し、1名は無回答であった。第2次調査においてはこの回答をした学生2名は、目的一致充実型に属していた。この回答をした大半の学生は、卒業時には本学幼児教育科に対し満足感を持って卒業している。
- (b) 2と3の別の学科にかわりたと思つたとの回答は、第1次調査、第2次調査、今回調査においてそれぞれ28%、50%、20%である。今回調査でこの回答をした学生14名の卒業時の学生類型については、7名が目的一致充実型、5名が本人納得型、2名が進路不適切型である。2名を除きこれらの学生も卒業時には本学幼児教育科に対し満足感を持って卒業している。
- (c) 大学をやめて働きたいと思つたとの回答は、第1次調査、第2次調査、今回調査にお

図16 やめたいと思つたことの内訳



本学幼児教育科の教育課程に対する学生の意識調査(Ⅲ)

いてそれぞれ25%、30%、40%と増加してきている。この回答をした学生29名中13名は目的一致充実型、10名は本人納得型、3名は進路不適切型、2名は期待はずれ型に属し、1名は無回答であった。目的一致充実型と本人納得型の23名79%の者は、本学幼児教育科に対し卒業時に満足感を持って卒業している。

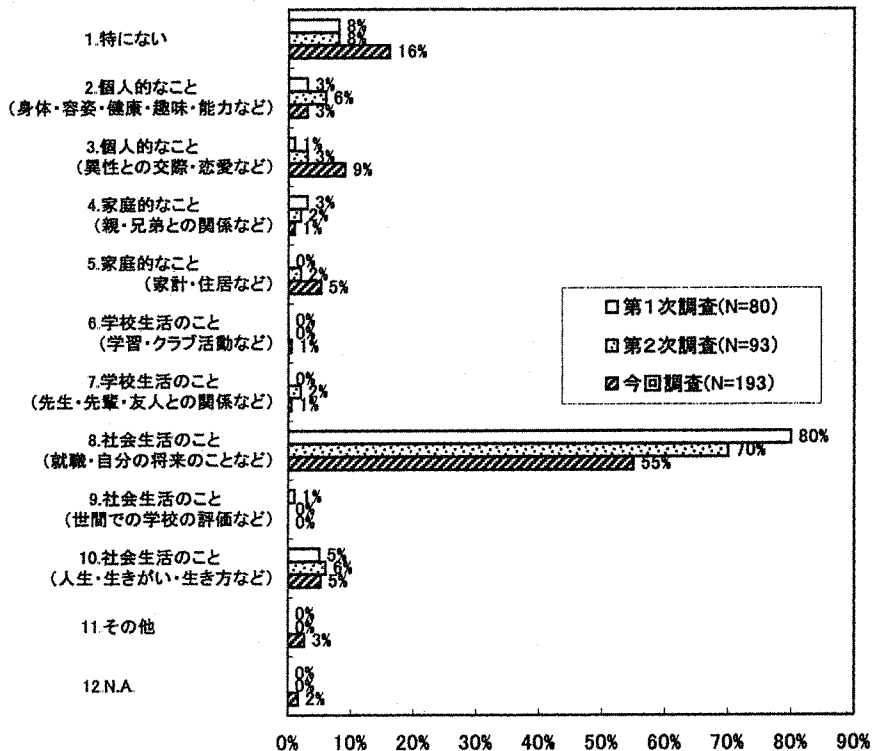
(d) 学生がやめたいと思ったとしても、実際のところそれほど深刻な事態を意味するわけではない。

(9) 学生の現在の悩み

(a) 図17は学生の現在の悩みについてのものである。学科開設以来この4半世紀のさまざまな客観的環境条件の変化にも関わらず学生の最大の悩みは就職や自分の将来に関する社会生活のことである。卒業が同時に社会生活の出発点を意味する限り、これは当然のことであろう。しかし、この就職などの社会生活に関する悩みは、第1次調査、第2次調査、今回調査においてそれぞれ80%、70%、55%と漸減してきている。

(b) これに対して、恋愛や交際などの個人的なこと（1%→3%→9%）や、両親の経済状態などの家庭的なこと（0%→2%→5%）に関する悩みが増加してきている。

図17 学生の現在の悩み



また、容姿・健康・趣味といった個人的なこと（3%→6%→3%）、生きがい・生き方などの青年期に特有の悩み（5%→6%→5%）も従来通り見られる。これらの総計は、第1次調査、第2次調査、今回調査においてそれぞれ9%、17%、22%と増加の一途をたどっている。今まさに社会生活の出発点に立って、自分の就職のことではなく、なによりも親の経済状態に悩み、恋愛や交際・容姿・健康・趣味・生きがいなどに悩む学生が出現してきていることを意味する。

- (c) 悩み多き青年期のただ中にいる学生にもかかわらず、特に悩みがないとする回答が第1次調査、第2次調査、今回調査において8%、8%、16%と倍増している。

4. 要約

これまでに実施された3回の調査結果の考察を通して幼児教育科の教育課程について学生の意識調査の結果を比較考察してきた。以上の考察から明らかになった主なことを簡条書きすれば、以下ようになる。

- (1) 専門職指向の学生が減ってきている。
- (2) 学科に対して入学時に満足感を持つ学生は6割に満たないが、卒業時には8割以上に達する。
- (3) 満足感は教科目の履修ではなく、友人関係が主なきっかけになる。
- (4) 就職に関することが不満のきっかけになることはほとんどない。
- (5) 卒業時点で自分の就職よりも親の経済状態や恋愛などに思い悩む者が現れてきた。
- (6) 幼児教育科への適合感を持って卒業するものは7割以上である。
- (7) 適合感は入学時と卒業時であまり変化しない。
- (8) 適合感を持つようになる主なきっかけは授業内容であり、不適合感を持つようになる主なきっかけは学外実習である。
- (9) 友人関係は適合感を高めるきっかけにもなる。
- (10) 学外実習は依然として学習の観点からは教育課程の中心的位置を占めている。
- (11) 音楽・美術・体育などの実技系の科目を役立つとする回答は、予想に反し意外と少なく1割に満たない。
- (12) 大学生生活の思い出は、学外実習・友人・幼児教育演習が3本柱になっている。
- (13) 大学をやめたいと思った者は4割近くに達するが、事態はそれほど深刻ではなく、大半の者が学科に対する満足感を持って卒業している。

第1次調査・第2次調査の調査報告では、授業内容の改善・教育課程の充実と就職支援体制の整備が課題として提言されていた。26年間でこれらはかなり改善された。それは満足感を持って多くの学生が卒業するようになったことに端的に現れている。教育課程の充実がはかられ、授業内容は改善され、就職支援体制も整備されたが、今やこうした改善や整備は当然のことと受けとめられ学生の満足感を高めるきっかけにはならなくなった。学生の満足感さらには適合感を高める契機は、学生の友人関係を充実させることの中にある。学生の友人関係を充実させる機能を教育課程の中に組み込んでいくことが、今後の新たな課題になるだろう。

本学幼児教育科の教育課程に対する学生の意識調査(Ⅲ)

引用注

(注1) 浅野俊道「本学幼児教育科の教育課程に対する学生の意識調査(Ⅱ)」、『帝国学園紀要』12号、1986年 p.83

(注2) 浅野俊道 前掲書 p.84

参考文献

浅野俊道「本学幼児教育科の教育課程に対する学生の意識調査(Ⅱ)」、『帝国学園紀要』12号、1986年 pp.69-90

鈴木康一「本学幼児教育科の教育課程に対する学生の意識調査」、『帝国学園紀要』4号、1978年 pp.181-195

幼児教育科の教育課程に関する調査

あなたはこの大学に入学してから2年間、どのように過ごされましたか。この調査は今までの学校生活をふりかえり、あなたの現在の気持ちをおたずねして、これからの教育の資料にし、よりよい幼児教育科にしていくために使いたいと思います。結果は全て統計的に処理し個人的に迷惑をかけることは一切ありませんので、あなた自身のありのままを書いて下さい。この調査は幼児教育科第1期生に対して24年前に、第9期生に対して16年前に実施したものと同じものです。よろしくご協力お願いいたします。

【記入上の注意】

- (1) 回答の中から一番当てはまるものをそれぞれ一つだけ選び、その番号・記号を○で囲んで下さい。
- (2) その他の項を選んだ場合には、() の中に回答を記入して下さい。

1 あなたが幼児教育科を選んだのは、次のどの理由からですか。

- | | |
|------------------------------------|----|
| 1. 幼稚園の先生になりたかったから | 36 |
| 2. 保育所などの保育士になりたかったから | 69 |
| 3. 将来、子どもを持った時、保育の知識・技術が必要になるから | 11 |
| 4. 子どもが好きだから | 57 |
| 5. 親 (1. 父 2. 母 3. 父母) がすすめたから | 2 |
| 6. 学校の先生 (1. 小 2. 中 3. 高) がすすめたから | 1 |
| 7. 先輩や友人がすすめたから | 0 |
| 8. 他にやりたい学科がなかったから | 5 |
| 9. その他 () | 12 |

2-① あなたはこれまでの大学生活をふりかえって、この学科に満足してきましたか。

入学当初→1年末期→今 (2年末期)

- | | |
|----------------------------------|----|
| 1. 満足 → 満足 → 満足 (入学当初よりずっと満足) | 66 |
| 2. 不満 → 満足 → 満足 (入学当初不満、後はずっと満足) | 47 |
| 3. 不満 → 不満 → 満足 (1年末期まで不満、後は満足) | 28 |
| 4. 満足 → 不満 → 満足 (1年末期ごろ不満、後は満足) | 23 |
| 5. 不満 → 不満 → 不満 (入学当初よりずっと不満) | 3 |
| 6. 満足 → 不満 → 不満 (入学当初満足、後はずっと不満) | 7 |
| 7. 満足 → 満足 → 不満 (1年末期まで満足、今は不満) | 12 |
| 8. 不満 → 満足 → 不満 (1年末期ごろは満足、後は不満) | 6 |

N.A. 1

2-② (①の間で、2. 3. 4. 8. を選んだ人だけ答えて下さい。4. 8. に答えた人は②③の両方に答えて下さい。) この学科に対して不満から満足に変わったきっかけは、どんなことでしたか。

- | | |
|---------------------------------|----|
| 1. 講義の科目 (科目名:) の学習が面白くなった。 | 6 |
| 2. 演習・実習の科目 (科目名:) の学習が面白くなった。 | 6 |
| 3. この学科に向けた職業を好ましいものと思うようになった。 | 21 |
| 4. 先生・先輩・友人などにはげまされた。 | 39 |
| 5. この学科が自分に向いていると思うようになった。 | 14 |

本学幼児教育科の教育課程に対する学生の意識調査(Ⅲ)

- | | |
|-------------|--------|
| 6. 成績が上がった。 | 1 |
| 7. その他 () | 13 |
| | N.A. 4 |
- 2-③ (①の間で4. 6. 7. 8. を選んだ人だけ答えて下さい。) この学科に対して満足から不満に変わったきっかけは、どんなことでしたか。
- | | |
|-----------------------------------|---------|
| 1. 講義の科目 (科目名:) の学習が面白くなくなった。 | 4 |
| 2. 演習・実習の科目 (科目名:) の学習が面白くなくなった。 | 4 |
| 3. この学科に向けた職業を好ましいと思わなくなった。 | 7 |
| 4. 先生・先輩・友人などの影響によって | 4 |
| 5. この学科が自分に向いていないと思うようになった。 | 5 |
| 6. 成績が下がった。 | 3 |
| 7. その他 () | 9 |
| | N.A. 12 |
- 3-① これまでの大学生生活をふりかえって、この学科に自分が向いていましたか
入学当初→1年末期→今(2年末期)
- | | |
|-----------------------------------|--------|
| 1. 向→ 向→ 向 (入学当初よりずっと向いている) | 76 |
| 2. 不向→ 向→ 向 (入学当初は不向き、後はずっと向いている) | 23 |
| 3. 不向→不向→ 向 (1年末期まで不向、今は向いている) | 15 |
| 4. 向→不向→ 向 (1年末期ごろ不向、後は向いている) | 28 |
| 5. 不向→不向→不向 (入学当初よりずっと不向) | 10 |
| 6. 向→不向→不向 (入学当初向、後はずっと不向) | 13 |
| 7. 向→ 向→不向 (1年末期まで向、今は不向) | 20 |
| 8. 不向→ 向→不向 (1年末期ごろ向、後は不向) | 4 |
| | N.A. 4 |
- 3-② (①の間で、2. 3. 4. 8. を選んだ人だけ答えて下さい。) 不向きから向きに変わったきっかけは、どんなことでしたか。
- | | |
|-------------------------------|--------|
| 1. 授業内容が自分に合って好ましいから | 1 |
| 2. 授業内容が自分の将来に役立つと思うようになったから | 43 |
| 3. 授業内容が専門的で、はりあいが持てるようになったから | 8 |
| 4. 先生とうまくいくようになったから | 0 |
| 5. 友人がはげましてくれたから | 11 |
| 6. 先輩がよく導いてくれるようになったから | 0 |
| 7. その他 () | 5 |
| | N.A. 2 |
- 3-③ (①の間で、4. 6. 7. 8. を選んだ人だけ答えて下さい。) 向きから不向きに変わったきっかけは、どんなことでしたか。
- | | |
|---|----|
| 1. 授業内容が自分に合わず好ましくないから | 4 |
| 2. 実習を経験して自分に向いていないと思ったから | 28 |
| 3. 授業内容が自分が将来やりたいと思っていることに
ふさわしくないと考えたから | 6 |
| 4. 授業内容がやさしすぎてはりあいが持てなくなったから | 2 |
| 5. 授業内容がむずかしすぎて分からなくなったから | 4 |

国際研究論叢

6. 先生とうまくいかなかったから 0
 7. 友人とうまくいかなかったから 2
 8. 先輩があまり導いてくれなかったから 0
 9. その他 () 2
 N.A. 17

- 4-① 次のA～Sの科目で、あなたが一番重点を置いたものに○をつけて下さい。
 4-② 次のA～Sの科目で、あなたが一番楽しかったものに○をつけて下さい。
 4-③ 次のA～Sの科目で、あなたが一番苦しかったものに○をつけて下さい。
 4-④ 次のA～Sの科目で、あなたが一番役立つと思うものに○をつけて下さい。
 4-⑤ 次のA～Sの科目で、あなたが一番勉強になったものに○をつけて下さい。

A～Sの科目	①重点	②楽しい	③苦しい	④役立つ	⑤勉強
基本教育科目	12	1	25	4	3
外国語科目	0	4	23	1	5
専門科目の保育・教育の科目	20	5	7	15	9
専門教育の心理の科目	8	8	11	5	9
専門教育の福祉の科目	2	0	5	0	1
専門教育の保健の科目	2	0	1	7	11
専門教育の保育内容の研究の科目	14	1	1	13	5
専門教育の音楽の科目	14	17	8	11	6
専門教育の美術の科目	4	14	2	1	3
専門教育の体育の科目	12	41	6	2	3
専門教育の幼児文化の科目	1	3	0	12	7
教科の専門科目	2	0	3	3	4
実習(幼稚園・保育所・施設・社会体育)	76	35	61	92	97
専門教育の幼児教育演習(ゼミ)	4	25	2	2	3
専門教育のレクリエーション科目	0	7	1	0	6
専門教育のパソコンの科目	0	7	16	10	4
専門教育の海外幼児教育実習・研修 クラブ・同好会活動	0	8	1	3	1
その他()	3	7	2	2	2
	0	0	1	0	0
N.A.	19	10	17	10	14

5 大学生活をふりかえって、一番印象に残っているできごとは何ですか。

1. 印象に残っていることはない。 2
 2. 先生のこと 0
 3. 友人のこと 61
 4. 実習(幼稚園・保育所・施設・社会体育)のこと 63
 5. キャンプ・スキー実習のこと 3
 6. 実習以外の科目(科目名:)の勉強のこと 0
 7. クラブ活動のこと 2
 8. 学校行事(大学祭・入学式など)のこと 2
 9. レクリエーション実技研修(東条湖) 11
 10. 実技発表会(ホール) 42
 11. 演奏会 4
 12. その他() 3
 N.A. 0

本学幼児教育科の教育課程に対する学生の意識調査(Ⅲ)

- 6 大学生活で一番いやなことは、何でしたか。
- | | |
|-----------------------------------|----|
| 1. いやな思い出はあまりない。 | 66 |
| 2. 再試験を受けなければならなかったり、単位がもらえなかったこと | 55 |
| 3. 処分を受けたこと | 0 |
| 4. 先生から誤解されたこと | 4 |
| 5. 友人から誤解されたこと | 10 |
| 6. 学校内で盗難などがあったこと | 3 |
| 7. 教室・控え室・トイレが、紙屑やタバコの吸い殻で汚かったこと | 7 |
| 8. クラブに入ったり、やめたりする時にいやな思いをしたこと | 0 |
| 9. 就職が決まらないこと | 14 |
| 10. 騒がしくて講義が十分ききとれなかったこと | 18 |
| 11. その他 () | 10 |
| NA. | 6 |
- 7-① あなたは、これまでにこの学科や大学をやめたい(変りたい)と思ったことがありますか。
- | | |
|-------------------|-----|
| 1. やめたいと思ったことはない。 | 120 |
| 2. やめたいと思ったことがある。 | 72 |
| NA. | 1 |
- 7-② (①の問で、2.を選んだ人だけ答えて下さい。) その時、どうしようと思いましたか。
- | | |
|------------------------|----|
| 1. 別の大学の同じ学科に変りたいと思った。 | 9 |
| 2. 別の大学の別の学科に変りたいと思った。 | 10 |
| 3. 同じ大学の別の学科に変りたいと思った。 | 4 |
| 4. 大学をやめて働きたいと思った。 | 29 |
| 5. その他 () | 18 |
| NA. | 2 |
- 8 あなたが、現在、一番悩んでいることはどのようなことですか。
- | | |
|------------------------------|-----|
| 1. 特にない。 | 31 |
| 2. 個人的なこと (身体・容姿・健康・趣味・能力など) | 6 |
| 3. 個人的なこと (恋愛・交際・結婚など) | 18 |
| 4. 家庭的なこと (親・きょうだいとの関係) | 2 |
| 5. 家庭的なこと (家計・住居など) | 10 |
| 6. 学校生活のこと (学習・クラブ活動など) | 1 |
| 7. 学校生活のこと (先生・先輩・友人との関係など) | 1 |
| 8. 社会生活のこと (就職・自分の将来のことなど) | 106 |
| 9. 社会生活のこと (学校に対する評価のことなど) | 0 |
| 10. 社会生活のこと (人生・生きがい・生き方など) | 10 |
| 11. その他 () | 5 |
| NA. | 3 |
- 9 あなたは、どのコースに所属していますか。
- | | |
|----------|-----|
| 1. 保育コース | 151 |
| 2. 音楽コース | 23 |
| 3. 体育コース | 19 |